

福江市文化財調査報告書第4集

福江・堂崎遺跡

(発掘調査概報)

1991

長崎県福江市教育委員会



遺跡遠景



外海部調査風景



発刊にあたって

かねてから懸案でありました堂崎遺跡の範囲確認調査が、このたび県文化課の指導のもとに実施され成果をあげましたことは、関係者一同衷心より感謝申し上げます。

遺跡の位置する堂崎の地は、深い入り江に面して明治後期に建てられたキリスト教史上重要な位置を占めるゴシック風様式の堂崎教会が美しいたたずまいを見せ、島内でも代表的な景観地になっている所です。

この周辺の海岸一帯では縄文土器や石器が発見され、以前から遺跡として知られていきましたが、昭和63年の台風により波の浸食を受け、遺物が多く露出し、貝塚の存在も明らかになり本格的に調査を行う必要が生じてきました。

今年度は、遺跡の範囲や性格を知るための調査を実施し、その結果、縄文時代から弥生時代に至る土器や石器、貝殻や獸・魚骨などが、広い範囲にわたり確認され、きわめて貴重な遺跡であることが判明しました。来年度も引き続き調査を計画しておりますが、当時の人々の生活が一層解明されることを期待したいものです。

本書が、文化財の保護および郷土を知る上で、学問研究の一助になれば幸いで

す。
調査にあたって、大変多忙の中調査を担当いただきました県文化課の安楽勉調査主任、小野ゆかり調査員の多大なご指導ご協力と、いろいろとお世話をいただきました地元関係者の皆様に、深甚の敬意と謝意を表して発刊のご挨拶といたします。

平成3年3月

福江市教育委員会
教育長 市川義久

例　　言

1. 本書は、平成2年6月25日～7月8日まで実施した、福江市奥浦2010番地および地先公有水面に所在する常崎遺跡の試掘調査概要報告である。
2. 調査は、常崎遺跡の範囲確認調査を目的として、福江市教育委員会が国庫補助および県費補助を受けて調査主体となり、市から派遣依頼を受け県教育庁文化課安楽勉主任文化財保護主事と、小野ゆかり文化財調査員が担当した。
3. 自然遺物の中で、貝類の同定および個体数については、県立北高等学校教諭山本愛三先生にお願いした。
4. 本書の編集には安楽があたり、小野ゆかりの協力を得た。
5. 出土遺物は、現在県文化課で整理中である。
6. 調査にあたっては土地管理者である浦頭カトリック教会の協力を得た。記して感謝したい。
7. 本調査に直接かかわった福江市教育委員会関係者は次のとおりである。
教育長・市川義久、社会教育課長・末永文隆、参事・松本昌、課長補佐兼管理係長・月川敬身、社会教育指導委員・松岡周光、この外に水産課課長補佐・島山義之氏から測量の応援を得た。

目　　次

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の立地と環境	2
III	調査の概要	5
1.	序	5
2.	遺物の出土状態	10
3.	遺　　物	13
IV	まとめ	27

I 調査に至る経緯

堂崎遺跡は、昭和51年堂崎教会を訪ね、海岸を散策していた海保幸晴氏によって発見された。同氏は西側内湾部の、疊が堆積していた表面より1個の礫器を採集され、県文化課へもち込まれたのである。その後遺跡発見届を行な長崎県遺跡台帳34—6として周知されている。

昭和52年、当時県文化財保護指導委員であった地元の松崎久磨治氏は、遺跡範囲が東側の外海に面した海岸にも及んでいることを確認されている。その後昭和62年、九州西北部を通過した台風12号は、五島列島各地で大きな被害をもたらし、堂崎遺跡においても海岸線が浸食され、遺物が散乱した状態となっていた。遺跡の浸食が進行するなか地元では、このような現状に対して、何らかの記録措置を講ずるべきではないかという意見が出された。

福江市教育委員会では、遺跡の保護対策を検討する必要から、昭和63年5月、当時同島内岐宿町で緊急発掘調査に従事していた、県文化課職員に対し、遺跡範囲の確認と、今後の取扱いについて現地指導してほしい旨要請があった。現地踏査は、県文化課から安楽・町田が、市教育委員会からは林・渡辺が参加して昭和63年5月27日に実施し、次の協議を行った。

- ① 東側の外海部には貝塚と思われる貝層中に土器や石器が混在して表面に認められるが、保護策については有効な手段が無く、浸食については潮間帯に位置する海底遺跡の宿命であること。
- ② 現時点では、これ以上浸食する前に記録保存を行った方がよいこと。
- ③ 遺跡の範囲は外海部、内海部それに砂丘全体にも及んでいる可能性があることなどから、範囲確認調査を実施し、遺跡の拡がりと性格を把握し、保護策を考える。

以上の協議事項をふまえ、福江市教育委員会では、平成2年度国庫補助事業による埋蔵文化財包蔵地範囲確認

調査を目的として、

平成2年6月25日

～7月8日までの

14日間実施した。

以下は調査の概要報告である。



第1図 昭和63年の現地協議

II 遺跡の立地と環境

五島列島は、長崎の西方約100kmに浮ぶ大小140余の島々からなり、古くは松浦郡値賀島と呼ばれている。

南西から北東につらなる島々は、南端福江島より久賀島、奈留島、若松島、中通島と展開し、さらに北には小値賀島、宇久島が位置し、その距離は100kmに及び、対馬暖流の影響を受け気候温暖である。地形的には断層と沈降による一連の地壘山地を形成し、そのため南では複雑なりアス式海岸が見られるのに対し、北では海岸までせり出した険阻な山が多い。また五島列島は火山の種類と数の多いことでも知られ、火山岩類が南北に貫いている。なかでも福江島南島部は、比較的新しい「鬼岳火山群」で構成され、流れ出した溶岩流は緩い傾斜地を形成し、埋没した岩礁地形をなしている。

福江島は、行政的には1市4町

で構成され、総面積324km²である。

その中で福江市の面積は約158

km²で半分を占める。福江の基盤は、

五島家第9代、宇久伊豆守勝が元

中5年(1388)辰の口城を築いて

以来のもので、藩政時代は、代々

五島家の城下として繁栄し文久

3年(1863)石田城は海に望んだ

城郭として改築が成就している。

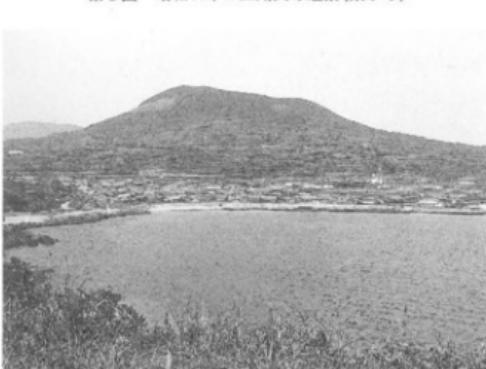
現在でも町の中心部に城郭は残り往時の面影をとどめる。市内には各官庁の機関も多く、五島における行政、文化、経済、交通の中心的役割を果たしている。

福江市における遺跡を概観すると、現在、遺跡台帳に収録されている遺跡は43箇所を数える。南の離島、赤島、大板部島、黄島にも縄文時代の遺跡が確認されている。本島部では、崎山地区向町に位置する白浜貝塚は、

昭和54年に調査され、縄文前期



第2図 昭和44年の江湖貝塚遠景(東から)



第3図 白浜貝塚遠景(湾奥)(南から)



第4図 堂崎遺跡周辺地形図

から弥生前期に至るまで良好な資料が出土している。また大浜町の大浜遺跡では砂丘より弥生中期の墳墓が検出されている。すぐ北方の中島遺跡¹²も確認調査が実施され縄文後期から弥生・古墳時代までの遺物や縄文後期の貯蔵穴が出土している。市内東部の海岸、江湖の浜では昭和44年発掘調査が行われ、溶岩流に乗った地層の潮間帯から、貝層に混り縄文前期曾根式土器が出土し、江湖貝塚¹³と呼ばれている。水の座遺跡¹⁴は道路工事に伴って調査された遺跡であるが縄文晩期を主体としている。さらに西方には弥生時代の住居跡を検出した一本松遺跡が位置している。これら南東部に位置する遺跡は、鬼岳火山群より流出した溶岩台地上に形成されている。

一方、北方部では海岸線が発達しているにもかかわらず、海岸まで山がせまっているため、立地条件が満たされず、遺跡が極端に少なくなる。小さな凹地に立地した浜泊遺跡と、本遺跡が認められるだけである。

堂崎遺跡は市の郊外北方の奥浦地区に位置する。西に戸岐湾、東に奥浦湾を擁し、北東は田ノ浦瀬戸を挟んで久賀島と対峙する奥浦半島の端部にあたる。

奥浦には明治41年(1908)に建てられたゴシック風様式赤煉瓦作りの堂崎天主堂がある。島内における教会の中心となっており、キリストian史上にも重要な位置を占め、建物は県文化財に指定されている。この教会の位置する所から曲鼻状に半島が突き出ているが、昭和30年代までは潮の出入りがあり、島になっていたといわれる。この半島は砂丘が発達して、島と繋がったもので、遺跡はこの平坦な部分全体に及んでいる。

外海部は波の浸食作用を受け表面は大小の礫で覆われている。西側の内湾部は穏やかな砂浜性で干潟部が出現する。時期的には縄文時代から歴史時代にかけてまでの遺物が得られているが、内湾、外湾の2面性を持ち合わせた数少ない遺跡である。



第5図 中島遺跡出土貯蔵穴

III 調査の概要

調査は、堂崎教会東側の広場から、南西に位置する島状の山地をほぼ南北に弧をえがいて繋ぐ砂丘と、それを挟む内海部と外海部の海岸線約14,000m²について対象とした。海岸部については、潮間帯に位置していたため干潮時を利用した調査となった。砂丘は、最高点が標高5mに達し、平均満潮位面は標高3mである。

試掘場は、西から東へA・B・C……北から南へ0・1・2……の記号を付け5mメッシュに区切った地点に設定したが、外海部については任意の地点に設けた。南側の砂丘部分については、砂丘の地形に沿って設定したため、方向に同一性をもたない。

1. 層序

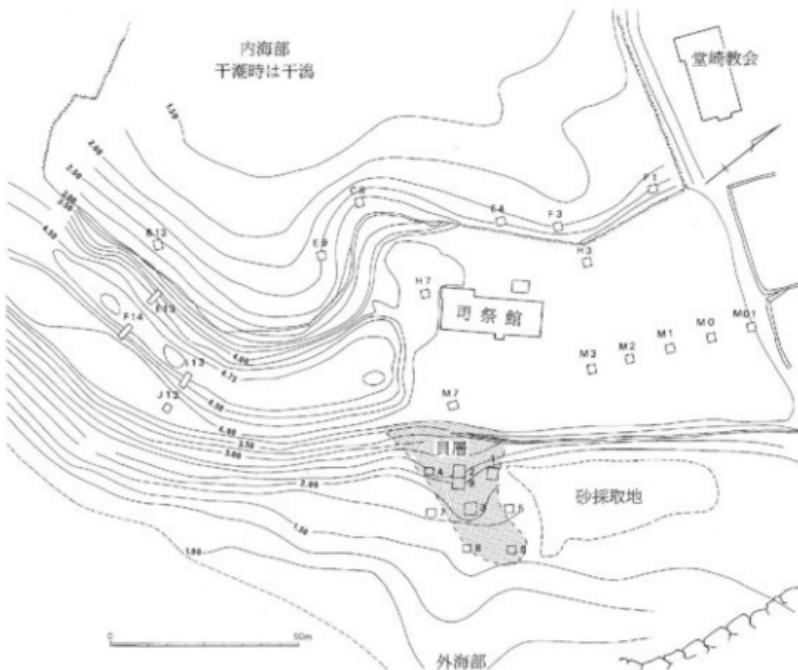
試掘場の層序は、3地区に分けて考えることができる。

第一は砂丘北側の部分である。

ここは、平坦に造成された広場と司祭館が建てられている。試掘場は砂丘を縦断するM列に設定した。その結果、M-0からM-1までは埋め土が厚く堆積している。以前は小さな舟が往来できる程の外海と内海が通じる流路があったと言われていたところで、その裏付けがされたが、遺物はほとんど出土しない。M-2・M-3からは遺物が良好な状態で出土した。層位は基本的に砂層であり、次の4層に区分される。1層は黒色砂層で表土、2層は混貝砂層、砂よりも破碎貝を中心とした新しい堆積層である。3層は混貝砂疊層、拳大の疊を多く含み、下



第6図 遺跡遠景(西から)



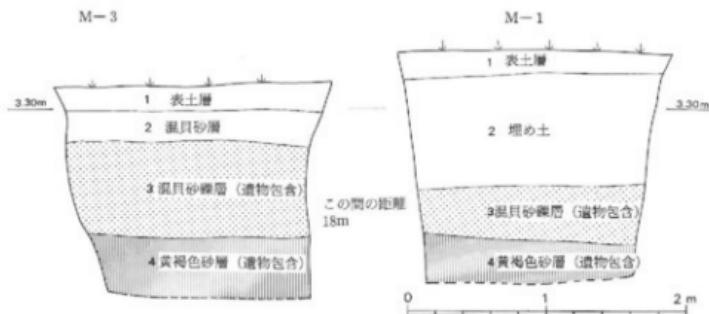
第7図 堂崎遺跡調査区配置図

部になると縄文前期の土器とともに貝殻なども出土。層の中程で平均満潮位面に達する。4層は黄褐色砂層、礫の混らない砂質層で、縄文前期の遺物とともに、貝殻・獸骨が含まれ、貝塚に近い状況である。M-7も基本的には同様の層位を示すが、遺物の量は少ない。H-3およびF-3は下層が殆んど細かい砂層が堆積し遺物は確認できなかった。

第2の地区は外海部である。波の浸食により貝殻や土器の散乱が認められた範囲に9箇所の試掘場を設定した。土層は次の3層に区分される。

1層は混貝疊層、本来の包含層が波により浸食され露出した層で、表面に貝殻や土器が散乱し、礫が全体を覆う。2層は貝層、主体は破碎貝の堆積層で、縄文前期の遺物や獸骨などが含まれる。3層は純貝層、きめ細かな砂層で無遺物層。湧水のため崩れやすく深く掘り下げることは出来ない。

この地区的北側には比較的広い凹地があり、干潮時でも水をたたえているが、以前ここでは砂が採取されていたことに起因している。したがって一部遺跡が壊された可能性も考えられる



第8図 M-1・M-3 東側土層実測図

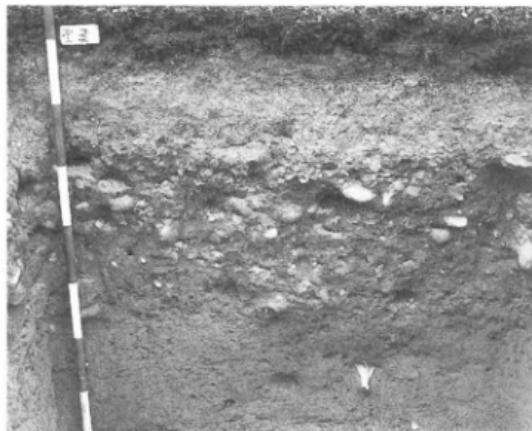
が、貝層を伴う遺物を出土する範囲は、海に突きだした南北20m、東西30mの微高地部分である。

第3地区は司祭館南側から一段高くなった南西に延びる砂丘部分で疊の堆積が目立つ。司祭館南手周辺には松や雑木が生い茂り、H-7を1箇所設定した。約2m掘り下げ6層の堆積が観察され、5層までの190cmは砂疊層で占められる。6層で砂層に変化するが、すべて無遺物層であった。

しかし約55m南西に設定したE-13・F-13・I-13試掘場のすべてから遺物の出土が認められた。土層は4層に区別される。

1層は表土、腐植物とわずかの礫が混在する黒色砂層で、須恵器、土師質土器を若干含む。2層は混疊砂層、小疊が多く須恵器、土師質土器が含まれる。3層は混砂疊層、拳大から人頭大に至る疊が主体で、縄文中期阿高式土器や後期と思われる土器、黒曜石を含む。4層は純砂層、きめ細かい砂質で貝殻や甕文前期曾畠式土器、石器を含む。

この砂丘に平行して設定した内海部のC-8・E-9・B-13は次の4層から成る。1層は表土、混貝の砂疊層で、比較的新しい時代の遺物が出土する。2層は混砂疊層、新しい破碎貝

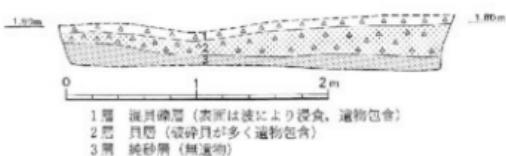


第9図 M-3 土層

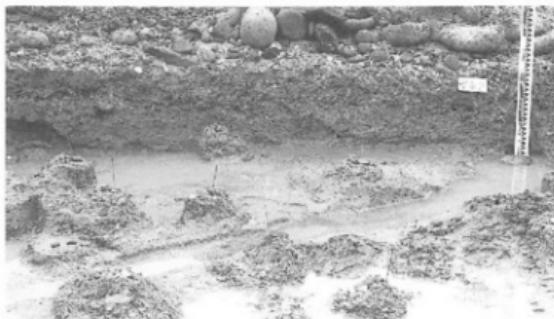
の中に礫が混在した層である。3層は砂利層、若干きめの粗い砂の層でE-9からはヨメガカサ製の貝輪が出土した。またB-13からは2層から3層にかけてアワビ貝の出土が目立ち、この周辺にも貝層の形成があるものと考えられる。4層は混疊砂層、礫の堆積が多くなり無遺物層。

以上今回の試掘場を中心にして層位の観察をしてきた。遺物の出土は全体的に及んでいるが、場所によっては時間的な差も認められる。

北側砂丘と海岸部においては縄文前期疊式土器と曾畠式土器が出土しており、比率から見ると前者が圧倒的に多い。また南西側の砂丘は縄文前期から中・後期に至るまでの遺物が出土しており、数の上から見ると、ここでは曾畠式土器が疊式土器を上回っている。つまり、砂丘形成の早い時期に古い時代の人々が住んでいた証左がここに見られるといえよう。



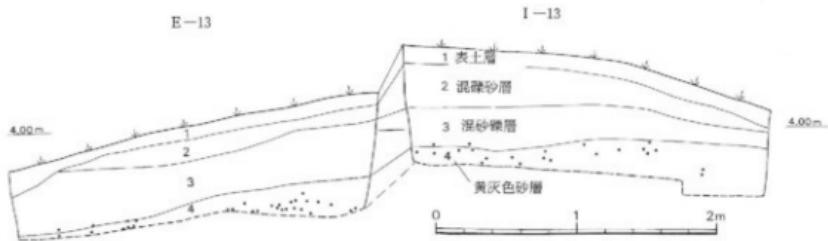
第10図 堂海2北壁土層実測図



第11図 堂海2北側土層

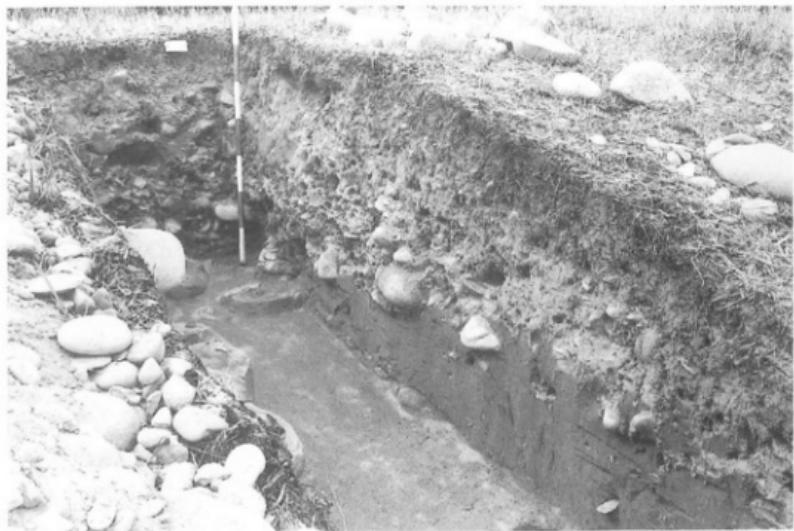


第12図 外海部調査風景(西から)



第13図 E-13・I-13東壁土層実側図

・は遺物出土垂直分布



第14図 I-13土層

2. 遺物の出土状態

今回の試掘調査では、遺物包含層が砂地や、貝層が主体だったこともあり、遺構の検出は見られなかった。遺物は土器・石器をはじめ獸骨や貝殻などの自然遺物が出土した。遺物出土区の3箇所について出土状況を観察してみる。北側砂丘のM-1・M-3は18mの間隔に設定した。層位については先に述べたとおりであるが、両者の違いはM-1に埋め土が見られるのに対し、M-3に2層である混貝砂層が堆積している点である。つまりM-1の2層および3層は潮の流路になっていたことから浸食を受けたと考えられる。遺物の出土は3層から4層にかけて集中し、曾畠式土器や舟の元式土器と思われるものが出土、獸骨も若干ながら見られるが、貝層を形成するには至っていない。

外海部では表面において貝殻類などの散布から、ある程度の拡がりを観察することができる。遺物包含層が浸食されているとはいえ、まだ貝層は良好な状況で残っている部分がある。シカやイノシシなどの獸骨や魚骨、貝殻類などの自然遺物が多く出土した。土器は小破片が多いが貝殻条痕を基調に、隆帯文を横位あるいは縦位に施した轟式土器が、曾畠式土器より多く出土



第15図 堂海2遺物出土状態



(縗式土器出土状況)



第16図 遺物出土状態

(曾縗式土器出土状況)

している。また石器については製品といえるものは少ないが、黒曜石の剥片類が少量出土している。土器の出土傾向から見ると、外海部が砂丘中央部よりも若干新しい時期と考えることができる。

南西側の砂丘に設定した I-13とE-13について見てみる。

I-13は外海、E-13は内海に面した斜面に位置する。1層は表土で2層は腐植物を含んだ灰褐色の砂層で須恵器や土師質土器が出土する。3層は混砂疊層で、人頭大から拳大の疊が多く含まれる。遺物は滑石を多く含んだ太形凹線文を有する縄文中期阿高式土器や条痕文を主体とした後期土器が見られる。4層は黄褐色の純砂層で砂の質もきめ細



第17図 獣骨および貝輪出土状態

かい。遺物は沈線を中心とした幾何学文様の曾畠式土器と磨製石斧の出土が見られた。この砂層は1m余り続くが、遺物は下層までは及んでいない。

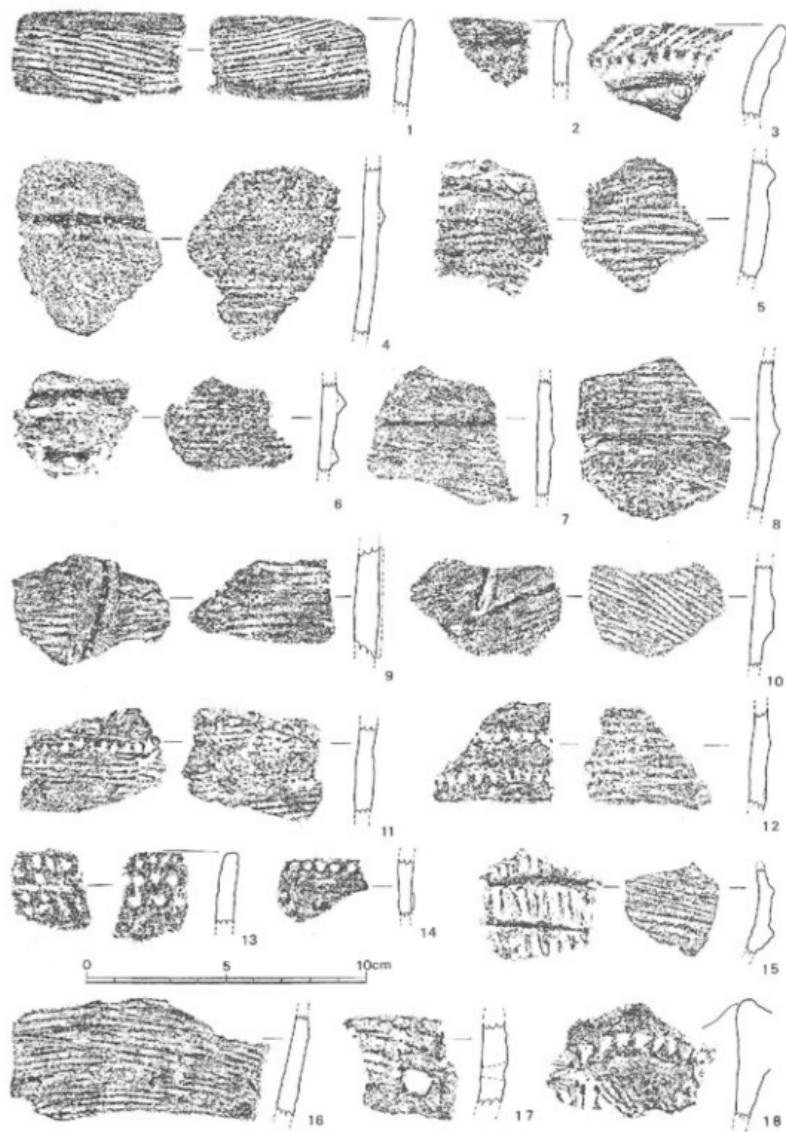
なおJ-13は標高4mの地点に入れ、約1.5m掘り下げている。表土層を含めて砂疊層が主体であるが、遺物は轟式土器が少量出土している。ここでも低い標高から古い時期の遺物の出土が観察され、砂丘の形成に合わせるように時間的な前後関係が認められる。

3. 遺物

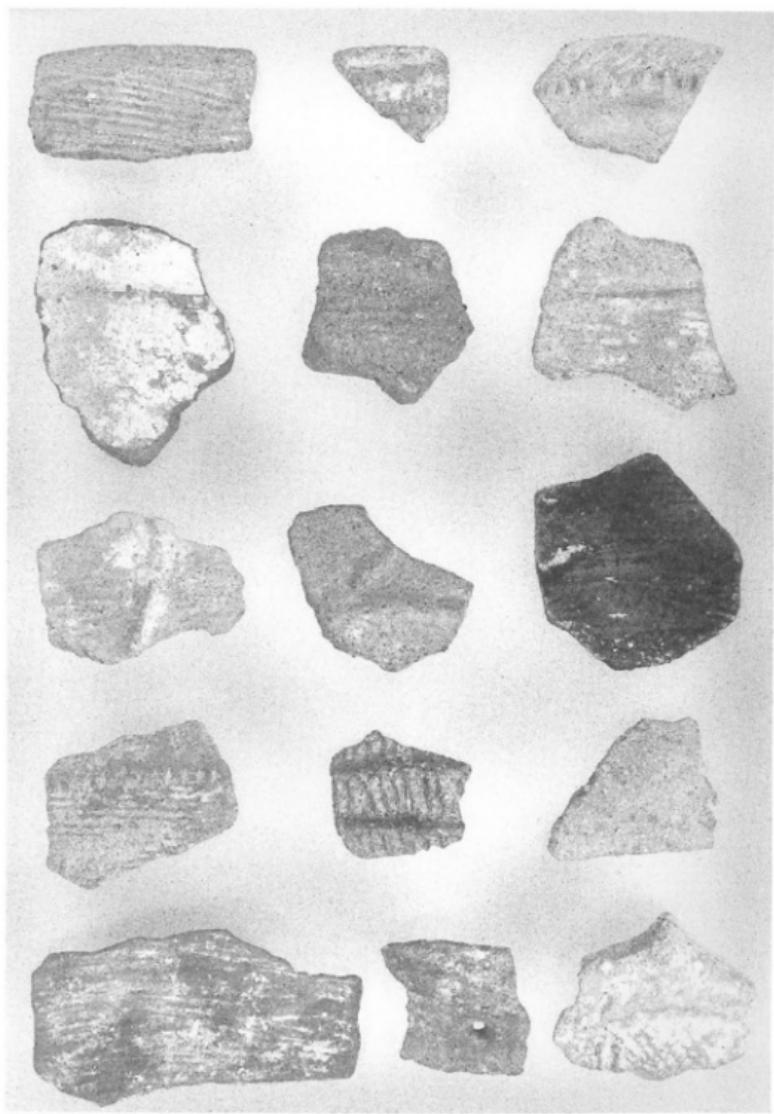
縄文土器（第18～24図）

今回の調査では、出土遺物として一番多かったのが縄文土器である。広い範囲からの出土が認められ、しかも前期から後期まで時間的な差と、出土地点の変化が見られる。ここでは地域ごとの出土遺物について観察してみる。第18図は外海部出土の遺物である。1～18の土器を示したが、この中で1～12までは森B式土器である。1は口縁部で、内外に丁寧な貝殻条痕を施し胎土には微細な雲母片を含む。2は外反気味の口縁直下に隆起線を巡らす。胎土は1と同じである。3はやや外反した口縁部で、外面には筐状のもので鋭利な沈線が斜めに付けられ、すぐ直下には、隆帶に刻目が入れられている。頸部にはさらに、弱い隆起がつまみ出され、ナデられている。胎土には微細な雲母が入る。4～10は二枚貝復縁による条痕が内外に施され、その上に細い隆帶が貼り付けされている。隆帶は横位と、縦位の曲線上に近いものが見られる。11・12は貝殻条痕で調整のあと、刺突の列点文が見られる。胎土には石英粒が目立ちよくしまっている。13は口縁部である。外面は竹管状の列点であり、内面は刺突状の列点が並び、細い沈線で分けられている。14は口縁部に近い部分であるが小さな刺突による列点があり、その下にボタン状貼り付けが見られる。15はうすい内湾した器形に隆帶を付け、その間を細い棒状工具で押し引きしている。内面には貝殻条痕による調整が行われ胎土にはわずかな雲母片の混入が見られ、堅くしまっている。この類似資料は伊木力遺跡¹⁷で曾畠III式に分類されたものに相当する。17はやや厚手の外面に粗い貝殻条痕調整を行い、内面には見られない。外面からの穿孔が1個見られる。18は山形口縁の部分で口内にも縄文が付けられ、外面は隆帶を湾曲して付け、その上に刺突を施している。さらにその下には縄文と沈線の組み合わせが見られる。小破片であるがその特徴から形式的には舟の元式になると思われる。胎土には粗い滑石粒を含む。

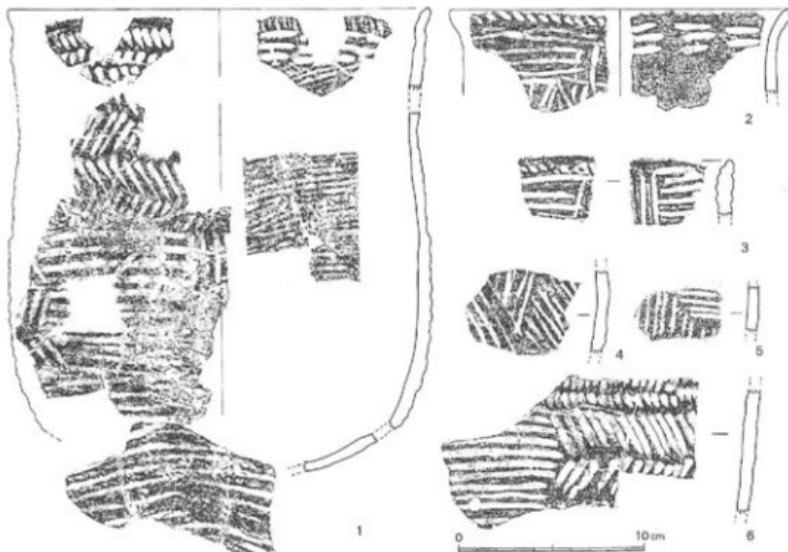
第20図1～6はI～13IV層出土の曾畠式土器である。1は一括出土の復原可能な土器である。胎土には滑石を多く含み、色調は赤褐色を呈する。口縁部はゆるく外反し頸部がわずかにすぼまる。外面には棒状工具による短斜沈線文が、内面には口唇部に押し引き列点文とその下に横方向に短沈線が施されている。胴部は弱いふくらみをもち横位や縦位の短沈線文の組み合わせの、いわゆる幾何学文で構成されている。底部は横位の沈線文だけになり、平底気味の平坦部まで全体におよんでいる。この土器には胴上部と底部に近い方にそれぞれ1個の孔が両面から穿たれている。図上による復原口径は約22.5cm、高さ約25cmである。2は1よりも強く外反する口縁で、外面には浅い沈線を横位に施したあとに、山形あるいは斜格子状に沈線が施される。口唇は平坦で刺突が巡り、内面は横位に短沈線が三段に施されている。3は口縁部で、内外面に横位と縦位の沈線の組み合わせが見られ外には刺突文が配されている。胎土に滑石を含まないので曾畠式土器とは違った感がするが、沈線も切れが深い。4・5は胴部で綾状の細い沈線が施文されている。いずれも滑石を多く含む。6は1と同一個体である。これら曾畠式土器



第18図 外海部試掘出土土器



第19図 堂海2出土の遺物



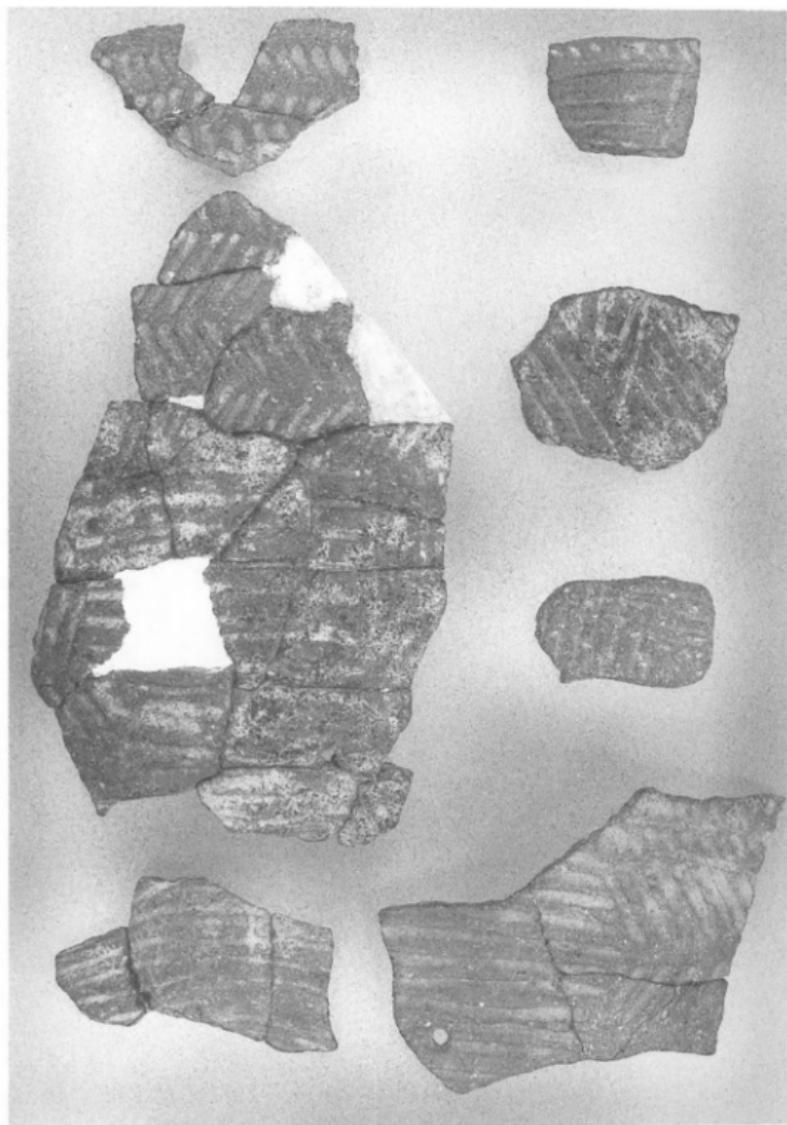
第20図 I-13出土曾畠式土器実測図

は市内下大津所在の江湖貝塚出土の文様構成に類似するものが多い。

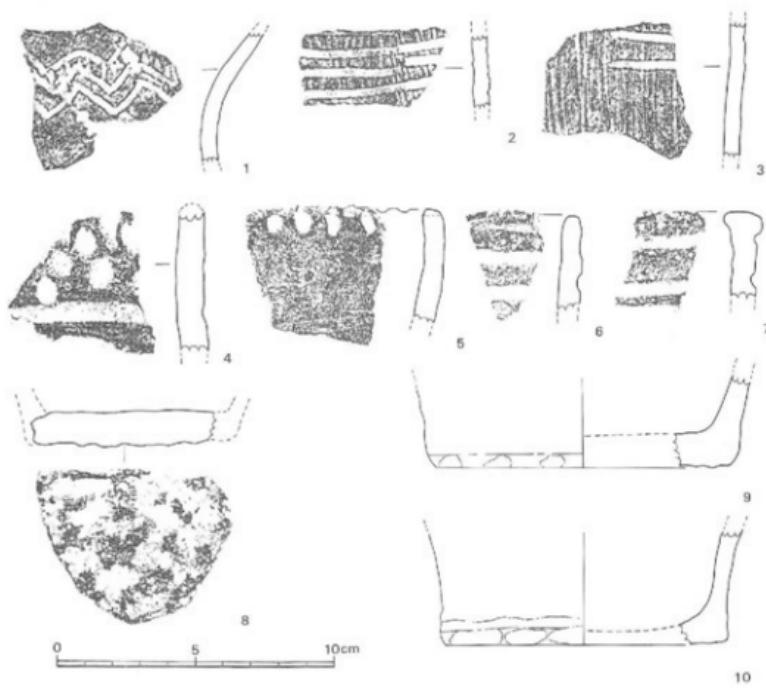
第23図1～10の土器はI-13Ⅲ層およびIV層の土器である。1は精選された胎土を用いた口縁に近い頸部である。くびれの部分に細い棒状工具で山形に3本の沈線文を描き、上段には刺突を施している。内面には貝殻による条痕がわずかに残る。轟D式の要素をもつ。2・3は同一個体と思われる土器である。縦方向に貝殻による条痕文を施し、その上に棒状工具により浅い沈線を横位に弱い波状に施し轟C式の要素をもつ。4～10は中期阿高式系の土器である。4は口縁がわずかに欠失するが太形凹文の列点と沈線の組み合わせ、5は口唇部に棒状工具で押し波状を呈し、キャリバー状に



第21図 曾畠式土器複製品



第22図 I-I3出土の曾焼式土器

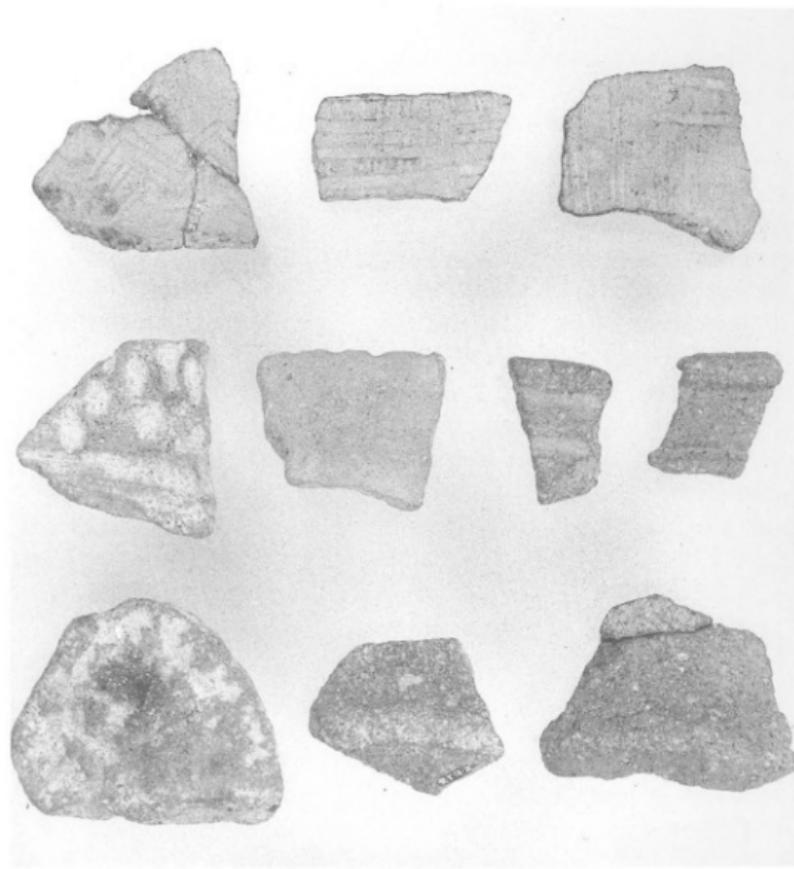


第23図 I-13出土の土器実測図

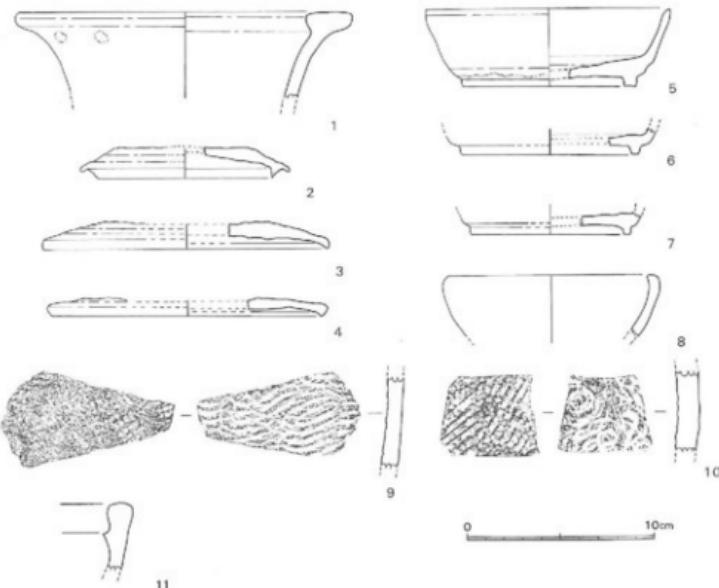
わずかに開くものと思われる。6・7は太形の沈線を有する口縁部である。8・9は底部である。8は立ち上がり部を欠く底で、凹凸が著しく、鯨底の特徴を有する。

その他の土器（第25図1～11）

1は壺形土器口縁部で弱い鋤先状を呈する。口縁平坦部および内面は横ナデされ胎土焼成も良好である。弥生中期後葉に比定されよう。M-7出土であるが、この他にも胴部などの小破片の弥生土器が出土している。1～10は須恵器である。いずれも小破片が多い。2～4は壺蓋、5～7は高台付碗である。8は小形の鉢である。9・10は壺形土器胴部の格子目および木目による叩き文様である。いずれも内窓部に集中する傾向が見られる。時期的には8世紀における所産である。11は中国輸入陶磁器の捏鉢である。この他にも青磁片が少量採集されている。



第24図 I-13出土の土器



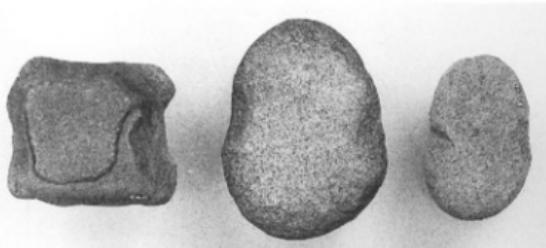
第25図 その他の土器実測図



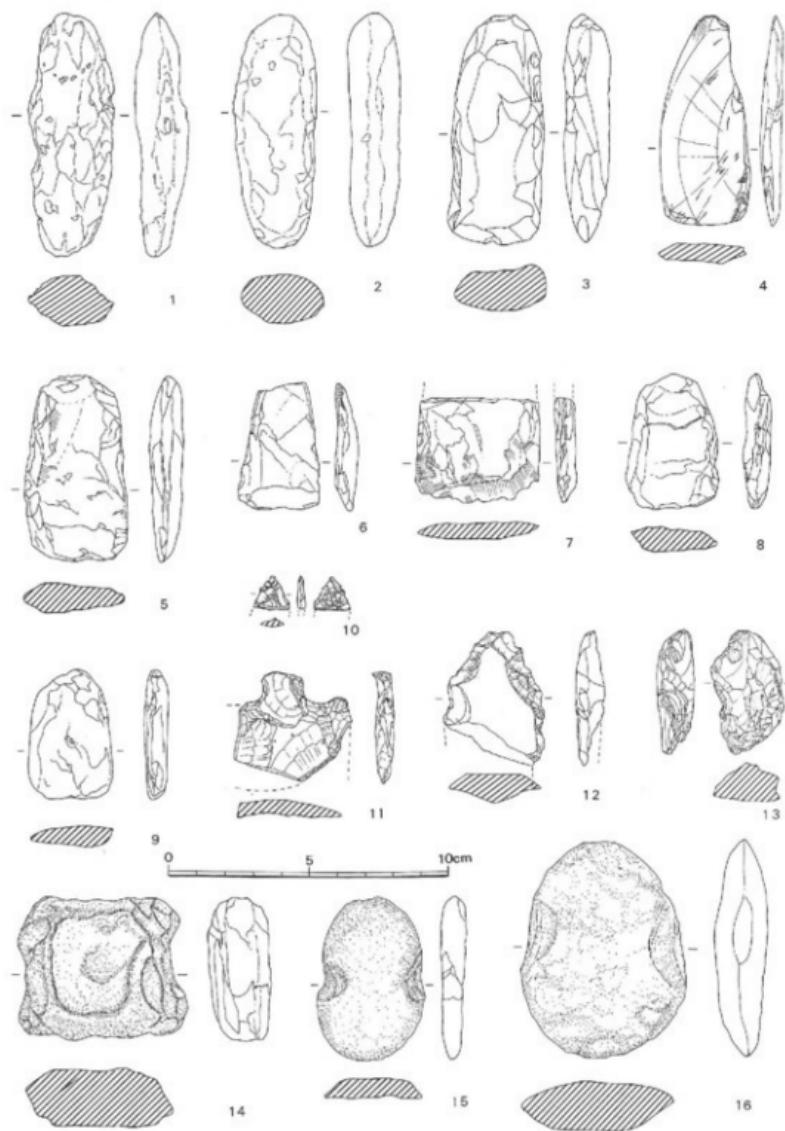
第26図 その他の土器

石器（第27～29図）

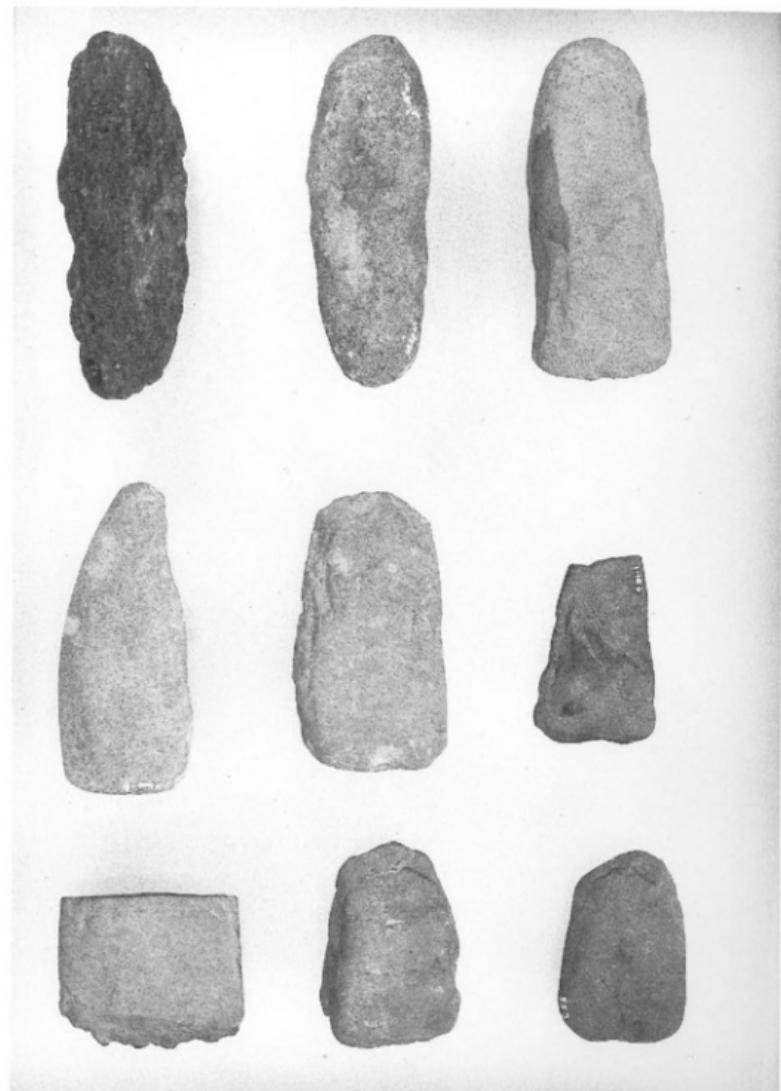
石器は土器の数量に較べると少量で、そのほとんどが縄文時代のものである。種類は石斧、石鎌、石匙、石錐、剝片石器などである。主要な石器を示すと1～3は外海部での表採品である。波に洗われており、表面は黒色で磨耗している。1は細長で長軸はわずかに湾曲している。本来は石斧の機能をもつと考えられる。石質粘板岩質。2は砂岩質で表面は磨耗している。両端は丸くなっているが敲石と思われる。3～9は磨製石斧である。3は断面厚手で刃部の方がよく研磨され、鎌刃状を呈し、頂部は丸くおさめられている。両側面には打痕が見られる。石質は安山岩製で重さ222g。4はI-13、4層で曾畠式土器に供伴する。安山岩をうすく横剥ぎし扁平に仕上げて、刃部を局部的に研磨している。頂部は両端がせばまる。5は扁平の局部磨製石斧。全体を打ち欠いて形を整えたあと、両側縁と刃部を中心に研磨を加え銳利な片刃に仕上げている。石質は硬質の安山岩で重さ128g。6は玄武岩質の横剥ぎ剝片を、バチ状に打ち欠き、両面とも下端部を丁寧に研磨し、刃部には鏽が見られる。7は扁平な安山岩剝片を利用し、刃部を局部的に研磨している。上部は半分欠失しており、刃部は使用によるものか、端部が欠けている。8は外海部2区出土の打製石斧、磨耗のためはっきりしないが、下端部は打ち欠かれたよう見える。石質は粘板岩質で板状にうすく剝離している。9は全体が磨耗し、研磨の有無ははっきりしない。石質安山岩質。10は石鎌と思われるが下部を欠失している。黒曜石製で両面から剝離が行われ尖端は銳利である。今回調査における出土は1点のみ。しかしここれまでには数点が表面採集で得られている。11は外海部5区出土のサヌカイト横剥ぎ剝片を利用した石匙。両側の両面から丁寧に小さくノッズを入れ、つまみ部を作り出し頂部に自然面を残す。横長の形状を呈すると思われるが、半分を欠失している。12はサヌカイト剝片を利用したスクレイパーである。この種の石器は数例見られる。粗く側縁加工したものが多く、鋸先などに使用されることも考えられる。13は継長の黒曜石フレイクである。裏面は1回の打撃で剝離され、主要面は数回の剝離と側縁部は小さく打撃が加えられている。14～16は石錐、14は砂岩質の角礫を利用したもので長軸に沿って抉りを入れている。重さ298g。15は梢円を呈した短軸に沿った方を簡単に打ち欠いたやや小ぶりの錐であるが縦半分を欠いている。16は花崗岩質で黒く小さな斑点が見られる。扁平な梢円礫を利用し、短軸を打ち欠いている。打面は片面だけである。



第27図 石錐



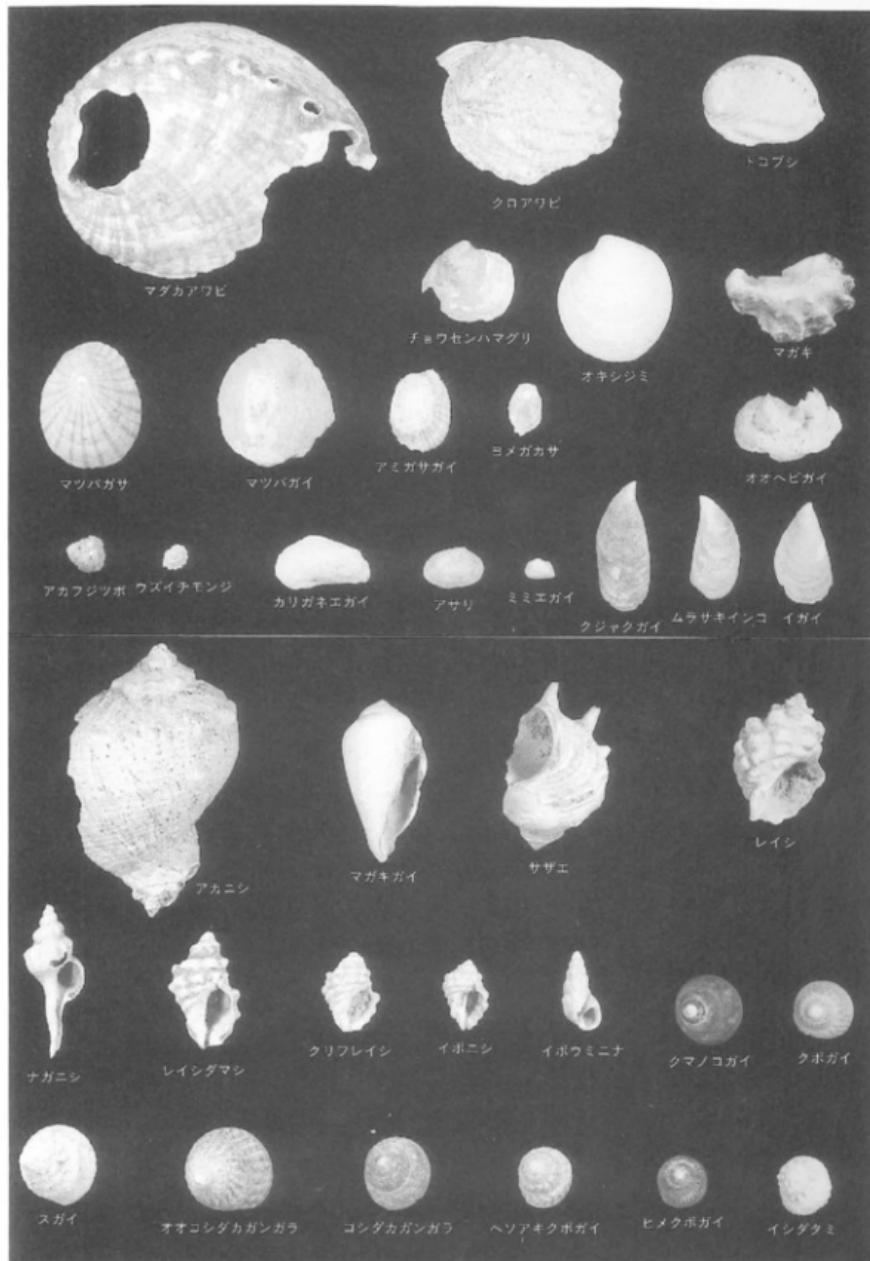
第28図 石器実測図



第29図 鼓石と石斧

外海部試掘填出土貝類

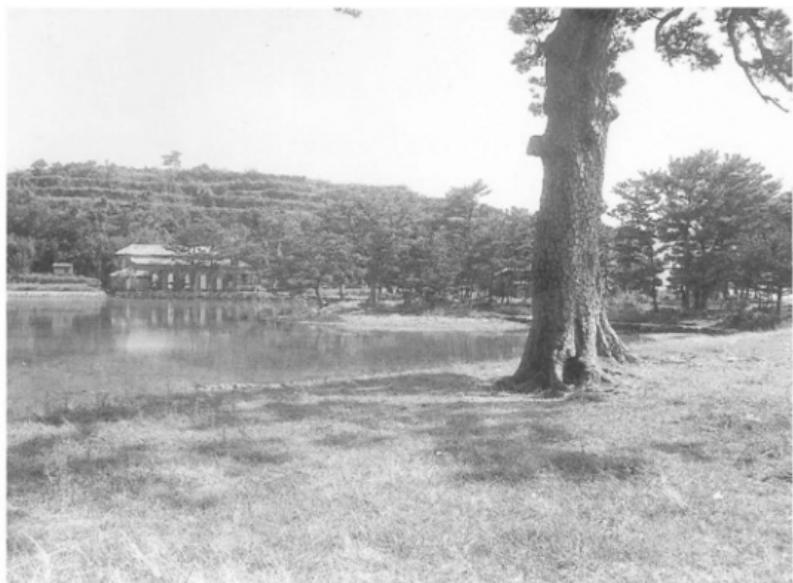
No	種類	個体数	比率%	No	種類	個体数	比率%
1	スガイ	1,623	25	35	ミミエガイ	1	
2	クマノコガイ	774	12	36	マダカアワビ	16	0.2
3	コシダカガンガラ	80	1	37	オキシジミ	37	0.6
4	レイシ	103	2	38	アサリ	1	
5	マツバガイ	30	0.4	39	アカニシ	2	
6	ザエ	256	4	40	トコブシ	3	
7	ウラカガミ	5		41	アカフジツボ	2	
8	クロアワビ	33	0.5	42	オオアカフジツボ	4	
9	イワガイ	4		43	ウズイチモンジ	3	
10	クリフレイシ	12	0.1	44	レイシダマシ	7	
11	カドベリナガニシ	1		45	フナクイムシ	1	
12	ベッコウイモ	1		46	マツバガサ	23	0.4
13	イガイ	74	1	47	ワニガイ	1	
14	チョウセンハマグリ	3		48	ナガニシ	1	
15	メカイアワビ	30	0.6	49	アミガサガイ	3	
16	ウミギク	1		50	ギンタカハマ	16	0.2
17	クジャクガイ	106	2	51	マキガイ	1	
18	イボウミニナ	605	9	52	マガキ	1,750	27
19	カモンダカラ	1		53	アワビ	6	
20	ザエノフタ	175	3	54	ナミナガシワ	2	
21	イシダタミ	97	1	55	エガイ	1	
22	イボニシ	9		56	ヒメアサリ	3	
23	サクラアオガイ	1		57	アコヤガイ	1	
24	ヒメクボガイ	72	1	58	オフクハマグリ	14	0.2
25	カリガネガイ	2		59	ツメタガイ	1	
26	カリガネエガイ	3		60	アマガイ	8	
27	ナガラメ	1		61	トマヤガイ	7	
28	ヘソアキボガイ	21	0.3	62	チリボタン	1	
29	オオヘビガイ	9		63	ハナエガイ	1	
30	ムラサキインコ	6					
31	オオコシダカガンガラ	386	6				
32	クボガイ	101	2				
33	セツカイ藻	1					
34	ヨメガガサ	1			合計	6,544	



第30図 出土貝類



南側砂丘から天主堂を望む（現在）



第31図 昭和36年当時の同上風景

（的野生志氏撮影）

IV ま と め

台風襲来による波の作用は、潮間帯に位置していた本遺跡も浸食し、今回の範囲確認調査に繋がった訳であるが、福江市には同じような潮間帯に位置する江湖貝塚があり、良い比較の対象となる。

本遺跡の場合は砂丘が大きな規模で現存するが、外海部に面した遺物の出土する地点も繩文前期の頃は砂丘が広く張り出していたと考えられ、昭和30年代の写真では松の大木が美しい景観を醸し出している。江湖貝塚は、現在全くの転疊が表面を覆いつくした海岸であるが、江戸時代の記録によれば、遺跡付近は松の大木が繁茂し白砂青松の地であったと伝えられている。現在こそ比較出来ないほどに地形の変貌が著しいが、海岸においては、疊の下に貝層が残り、その下層は無遺物の砂層が堆積している点も、極めて類似した立地環境と言えるのである。

貝類の同定をお願いした山本愛三氏によると、本遺跡の場合63種類が確認され、江湖貝塚の場合は84種類にのぼっている。しかも共通している点は岩礁性のサザエ、クマノコガイ、スガイなどが多いことである。

出土遺物についてであるが、土器、石器、貝製品、自然遺物が得られている。しかし貝層を伴う遺跡としては骨角器の発見がなかった。このことについては来年度の調査に期待したい。石器についても少量であったが、黒曜石の剝片類は出土しており、かなり持込まれていたことが窺える。サヌカイト製の石器は鈎先状を呈するものが見られ、対馬暖流型文化の影響を受ける特徴をよく現すものといえる。石鍤については4点出土しているが、とりたてて大きなものはなく、300gを越えない。江湖貝塚では碇石と思われる1kgを超えるものが多く最大は15kgに達するものまであり、漁撈方法を考えるうえで、今後の課題である。なお疊器については今回の調査では出土していない。

土器については、外海部において縦帶文を基調とした轟B式が主体を占めることが判明した。従って貝層も同じ時期が考えられる。しかし今回の調査区は波の浸食を受けた部分であり、曾畠式も若干出土していることから、さらに慎重な検討が必要と思われる。南側の砂丘から出土した曾畠式土器は文様も整然と区画されたII式の特徴をもつものも見られるが、文様帯が乱れIII式の段階には入るものもある。なおI-13・IV層出土の轟D、Cの要素を持った土器は、ほぼこの曾畠III式と同じ層位による出土である。

なお本遺跡の年代観であるが、江湖貝塚の放射性炭素の測定による曾畠式土器の年代は5310±40y・B・P (GAK-4055マガキ) であり、他の遺跡では、5300y・B・P~4700y・B・Pを示している。従ってこの前後を含めて生活のピークがあったことが考えられる。さらに弥生、古墳、歴史時代まで断続的に生活の場として利用されてきたことが推察される。

詳細な考察については、次回の調査の結果を待ってまとめたい。

参考文献

- 註 1. 松岡史、橋昌信他『五島大板部洞窟の調査』
—縄文時代の水中貝塚—大板部洞窟調査団 1986
2. 安楽勉編『白浜貝塚』福江市文化財調査報告書第2集 1980
3. 酒詰仲男『大浜遺跡』「五島遺跡調査報告」長崎県教育委員会 1964所収
4. 村川逸朗編『中島遺跡』福江市文化財調査報告書第3集 1987
5. 坂田邦洋『曾畠式土器に関する研究』江湖貝塚 1973
6. 高里晋司編『水の窪遺跡』福江市文化財調査報告書第1集 1976
7. 同志社大学考古学研究室編『伊木力遺跡』多良見町教育委員会 1990



奥浦小学校生徒の見学